

臨地実習における看護学生の Sexual Harassment 対策 —全国看護系大学への悉皆調査に 基づく予防と対応への取り組み—

富岡優理恵、青木恭子、坂上明子

藍畑麻美、林はるみ



本研究は、看護学生を臨地実習における Sexual Harassment (SH) から守り、看護学生が安全に実習経験を積める環境を整え、看護学生/患者双方の尊厳や健康を守ることを目指した取り組みの第一歩であった。

看護学生は、臨地実習において患者や患者親族、施設職員等から SH を受けていることが国内外で報告されている。SH は看護学生のセクシュアリティを傷つけ、人間関係構築を妨げる重大な行為であるが、臨地実習における SH 対策は確立しておらず、日本の看護基礎教育における看護学生への SH 対策の現状も明らかになっていない。

また、医療現場における SH は複雑な事象である。例えば、病状そのものや病状に伴う不安等によって引き起こされる行動が SH 行為として表出される場合もある。そのため、表面的な行為を SH と決めつけることなく、看護専門職者として、患者の背景・病状を深くアセスメントすることが必要である。つまり、看護教育における SH 対策は、看護学生が SH から自身の身を守ることに加え、患者のセクシュアリティを尊重するためにも重要であると考えられる。

本研究では、日本全国の看護系大学におい

て実施されている臨地実習における看護学生への SH 対策（予防と発生時の対応）とその困難や課題を明らかにすることを目的とし、Google フォームを用いたオンライン調査を実施した。本通信では、第1報として、教員の SH への対応経験を報告する。

研究協力が得られた教員の約半数が、臨地実習において看護学生が受けた SH 事案の報告・相談への対応経験があった。看護学生は全ての臨地実習科目で SH を受けていたが、教員が看護学生から SH の報告・相談を受ける時期や経路は様々で、看護学生は SH を受けて直ぐに報告・相談できない場合も多かった。看護学生が SH を受けた相手は患者が最多であったが、施設職員や大学教員、看護学生からも SH を受けていた。また、看護学生が患者から受けた SH の報告・相談に対応した教員の内、SH 行為を行った患者の背景・病状を看護学生がアセスメントできるように助言・指導をしていた教員は約半数に留まっていた。

教員は看護学生を擁護しながら SH 事案の状況把握や実習環境の調整に努めていたが、SH 行為を行った患者側のセクシュアリティへの意識を持って看護学生への援助をしている教員は限られていた。臨地実習における看護学生/患者双方のセクシュアリティの尊重には課題があり、看護学生が受ける SH への対策構築は急務であると考えられた。なお、本研究結果は、次年度、学術集会にて発表予定である。